

じょうもんじだい

2. 縄文時代

はじめに：縄文時代の自然のようすと暮らし

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



現在の林。左がカシワ、右がハルニレ。約8,000年前にはこれらの木々が森をつくった。



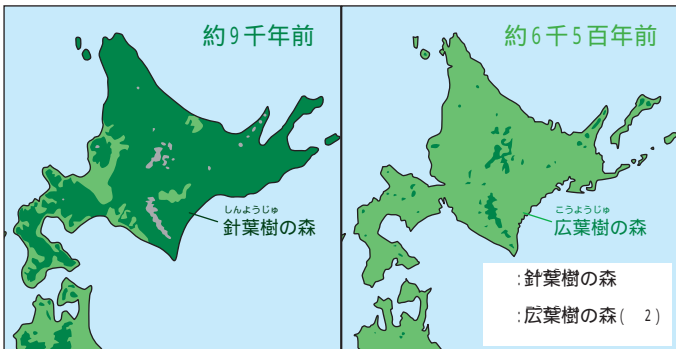
エゾシカ。

寒い「氷期（ p52）」は終わりに向かい、地球は暖かくなっていきました。ただし何度か寒い時期もあり、とくに1万2千年前ころからは、2万年前ころにもどったようなひどい「寒のもどり」がありました。（ p62）

このように寒暖をくり返しながらかも暖かくなるにつれ、エゾマツやトドマツなどの針葉樹が減り、落葉広葉樹の森林が広がってきました。

およそ8,000年前には、今ある自然な林の木とほとんど同じような、ハルニレやオニグルミの木、カエデやドングリ（カシワやミズナラなどの仲間）の木、キハダの木といった木々が森を作っていました。

また、マンモスやバイソンなどの大型の動物は北海道からすがたを消し、エゾシカやヒグマ、ウサギやタヌキといった動物が増えていきました。



約9,000年前には、十勝平野の多くが針葉樹におおわれていたが、約6,500年前には今より暖かくなり、陸地がせばまり、平野のほとんどが広葉樹におおわれた。
(参考:「気候変動」より、改変)

河口が少し上流にあった「縄文海進」

およそ6,000年前、暖かさはピークをむかえました。平均気温は、今より2 ほど高かったといえます。

陸の上にある氷がたくさんとけるため、海の水が増え、海水面が今より3～4m高くなりました。そのため、海に近い低い土地には海水が入りこみ、十勝川などの河口も、今より少し上流にありました。

こうしたようすを、海が陸に進んでくるので「海進」といい、この時期の海進を「縄文海進」といいます。（ p64）

暖かくなったあと、寒くなっていく

およそ5,000～4,000年前になると、気候は寒くなっていきます。

トドマツやエゾマツなどの針葉樹や、シラカンバ（シラカバ）といった木が増えていきます。

寒さは地面をこおりつかせ、湿地では「十勝坊主」とよばれる、地面のもり上がりことができました。

縄文時代の終わるころには、少し暖かくなり、その後も寒暖をくり返しながらか、今日にいたっています（昔の気温変化のグラフ p62）。



帯広畜産大学(帯広市稲田町)の農場横にある「十勝坊主」。草の集まりではなく、地面がもり上がっている。

1 落葉広葉樹(らくようこうようじゆ)：広葉樹(こうようじゆ)：広く平たい葉を持つ樹木のうち、冬(熱帯や亜熱帯では乾期)になると葉を落とす樹木のこと。
2 広葉樹の森(こうようじゆのもり)：この場合は落葉広葉樹林。落葉広葉樹林には、

比較的に寒いところの「冷温帯落葉広葉樹林(れいおんたいらくようこうようじゆりん)：ハルニレやミズナラなどの林」と暖かいところの「暖温帯落葉広葉樹林(だんおんたいらくようこうようじゆりん)：クヌギやクリなどの林」がある。約6,500年前に

と き 土器と弓矢を使う

およそ1万2千年くらい前から始まった縄文時代になって、大きく変わったことは、「土器」が使われるようになったことです。土器は、粘土をこねて形にし、火で焼いて作ったナベやカメなどの器です。(土器づくり p88)

土器を使うことで、ドングリや野草などを食べるために、しづみ(アク)をぬくことができ、また、料理法として、煮炊きができるようになりました。木の実を割ったりすりつぶしたりするための、すり石なども使われました。

また、ヤリだけでなく、弓矢を使って動物をとるようにもなりました。大きくてもクマやシカくらいという、小さくてすばしっこい動物をつかまえるためでしょうか?

さらに、魚をとる時には網を使うようにもなりました。(川漁 p93)



と き 土器づくり。



弓矢。



すり石と台石で植物加工。



いし おので木を切る。

(イラスト:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 4)



ふくげん たてあなしきじゅうきょ (上)復元された竪穴式住居。



ふくげんさぎょう (右)復元作業。地面をほり下げ床にする。保温性は高い。(帯広・原始人の会)

(写真:2枚とも北澤実氏)

たてあなしき しゅうらく 竪穴式の家と集落

縄文時代には、「竪穴式住居」と呼ばれる家が建てられるようになりました。

地面を数十cmほり下げて床にして(これをタテの穴=竪穴という)柱を数本立てた上にヨシ(アシ)などの草や木の皮の屋根をかぶせたものです。この上にさらに土をかぶせるタイプもあります。床のまん中は火をたくところ(炉)で、ここで料理をし、家の中を暖めました。

また、移動しながらキャンプを続けていた旧石器時代とは違って、同じ所にずっと家を持ち、2~5軒くらいの家が集まり(集落)をつくるようになりました。(ただし、季節によって移り住むこともあったようです)

こうずい 川の近くで、洪水にはあわない場所

集落は、多くが川を見下ろした高台に作られます。近くでわき水が出ることも大切だったようです。

川は水や魚を得られるところですし、「道路」としての意味も重要でした。(アイヌ文化と川 p118)

一方、高台であれば洪水にもあわず、水はけがよいため、気持ちよく住むことができます。

こうしたことは、旧石器時代の遺跡と同じです。ただ、縄文時代にはわりあい川に近い場所が選ばれることもありました。

季節によっては、河原のような場所に家をつくって住むこともあったようです。



あかつきいせき だんきゅう かみさつない に ビーめん (曙遺跡のある高台(段丘:上札内 b面 p54)。この遺跡には、縄文時代だけでなく旧石器時代の人も暮らしていた(p78)。帯広市。

は、道南・道央の海岸部の一部と、本州東北地方の広い部分には暖温帯落葉広葉樹林が広がっていたという。(参考:「気候変動」より)
3 1万2千年前(1まん2せんねんまえ):この本では大正3遺跡の土器(p83)を

もって、十勝の「縄文時代の始まり」としている。
4 帯広百年記念館埋蔵文化財センター(おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター):帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん

土器にも流行がある...「文様」や形のうつりかわり

縄文時代の「縄文」とは、縄を転がして土器につけた文様(もよう)のことです。縄文時代とは、基本的に、縄文のついた土器が使われる時代です。

ただし、時期によって文様は変わっていきます。文様がついていないもの、ヘラで線を描いたもの、つめで文様をつけたもの、より糸を棒にまいておつけたもの、四角や丸い型(スタンプ)をおつけたもの、などさまざまです。

中には、川魚の骨をおつけた文様もあります(p92)。作る時の台にしたのか、底にホタテ貝の貝ガラやカシワの葉のあとがある土器もあります(p91)。

また、形についても、オッパイ形の底をした土器、平らな底をしたもの、ポウルのような丸底やとがった底のもの、注ぎ口がついたもの、などというように、いろいろあります。(p83、p92、p95、p96)

こうした土器の種類は、日本列島全体で同じ流れがあり、さらに地域ごとのバリエーションが見られます。帯広百年記念館には、いろいろな時期の土器をならべたコーナーがあります。

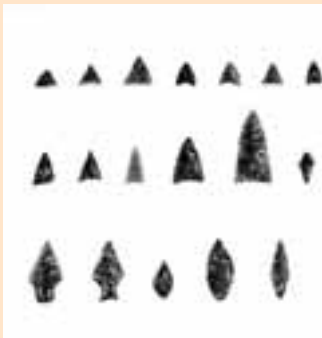


時期によって変わっていく縄文時代の土器。(帯広百年記念館)



いろいろな土器の文様。(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 2)

縄文時代も「石器時代」... 石器の種類にちがいはある



石のヤジリ。縄文時代から作られる。



石のおの。



石のヤリ先。



石のキリ。

旧石器時代に続いて縄文時代となります。しかし、石器時代が終わったわけではありません。石器時代の終わりは、石器にかわって鉄製や青銅製の道具(金属器)が使われるようになった時です。日本列島で金属器が使われるようになるのは、続縄文時代(北海道)や弥生時代(本州以南)になってからです。しかも、続縄文時代や弥生時代でも、まだまだ石器は使われています。

ですから、縄文時代も(続縄文時代も)りっぱな「石器時代」なのです。縄文時代の石器について、旧石器時代と最もちがうことは、矢の先につける「ヤジリ」が作られるようになったことです。また、全面をみがいた石おのが作られることも大きな特ちょうで、自然のようすが変わったことと関係しているようです。

そのほか、魚とりの網につけるおもりも作られるようになりました(p93)。

(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

第1章 十勝の平野や川ができるまで
第2章 先史時代と川
第3章 アイヌ文化と川
第4章 十勝開拓と川
第5章 発展、今、そして未来へ

用語
さくいん

1 帯広百年記念館(おびひろひやくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館

2 帯広百年記念館埋蔵文化財センター(おびひろひやくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター): 帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

じょうもんじだい

縄文時代はいつからいつまで？ ... 北海道では「続縄文時代」もある

ぞくじょうもんじだい

本州以南では、1万3,000年前ころを縄文時代の始まりとしています。

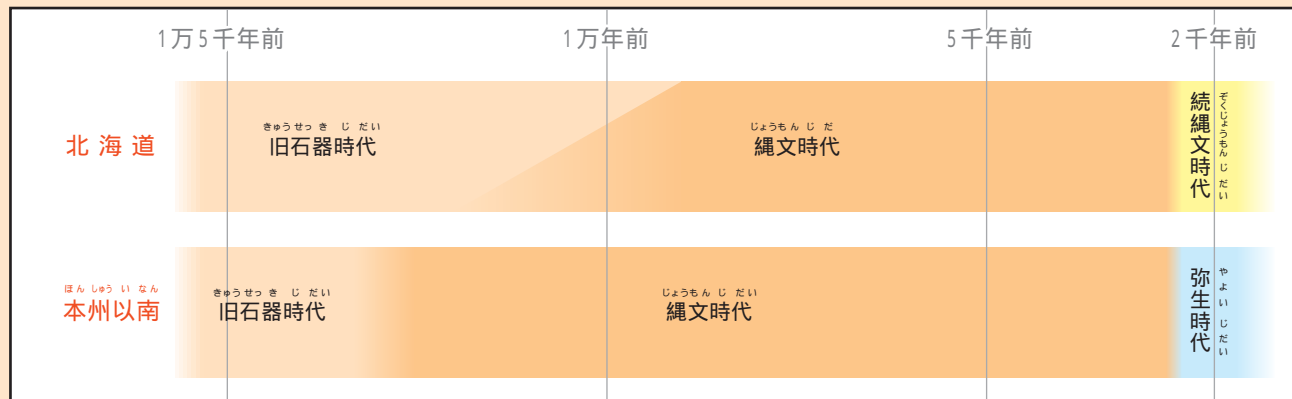
十勝でも、約1万2,000年前の土器が見つかります(大正3遺跡 p83)。しかし、次が約9,000年前の土器で、その間をつなぐ遺跡が見つかりません。そのため、十勝に1万2,000年前ころから縄文文化が定着したかどうか、今のところわかりません。

およそ9,000年前になると、帯広市南部の「八千代遺跡(p90)」をはじめ、十勝のあちこちで遺跡が見つかり出します。このころには、十勝は土器

と弓矢の文化に入っていました。ただし、日本列島全体の縄文文化と同じになるのは7,000年くらい前になってからです。

縄文時代が終わるのは、およそ2,500年前、本州以南に稲作や金属の道具が広まったころです。本州以南では、「弥生時代」へと入ります。

しかし、北海道では農耕社会には移らず、自然の中から食料を得る生活が続きます。そこで、本州以南で弥生時代が始まってからを「続縄文時代」と呼んでいます。(p100)



北海道と本州以南の時代のちがいが、ただし、本州以南すべての地域が一気に同じ文化に変わったわけではない。

木や骨、角の道具も使われていた ... 残っているものがすべてではない



紅葉山49号遺跡(石狩市)で見つかった「櫂」。舟をこぐもの。(写真:石狩市教育委員会蔵)

遺跡から見つかる道具は、土器や石器など長い間土の中にうまっていてもくさらないものがほとんどです。

しかし、木でできた器や道具、動物の骨や角で作られた釣り針やいろいろな道具(骨角器)もたくさん使われていました。

ただ、これらのものは、長い間にくさって土にかえてしまったので、見られなくなったただけなのです。

十勝では見つかりませんが、貝塚や湿地の遺跡では、こうした道具がくさらずに残ることがあります。

例えば、石狩市の紅葉山49号遺跡では、4,000年くらい前の木製品(丸木舟の一部・舟をこぐ櫂・皿・石おのの柄など)が見つかりました。(p93)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

3 縄文時代の始まり(じょうもんじだいののはじまり): この本では基本的に、約1万2千年前を十勝における縄文時代の始まりとしている。

4 貝塚(かいづか): 昔の人が食べた貝の貝ガラがたくさんたまっている遺跡。ただのゴミ捨て場ではなく、儀式(ぎしき)や祈り(いのり)の場とも考えられている。(p94)

土器づくり ... 1. 準備して形を作る

ここでは、土器づくりの大まかな流れを説明します。
 実際にうまく作るためには、各段階で、もう少し細かい技術が必要となります。

注意：土器づくりには、さまざまな「コツ」が必要です。とくに野焼きの時には危険な場合もあります。粘土を用意するところから、経験者に指導を受けるようにして下さい。

必要なもの

材料：粘土（ガケなどに露出していて、ねばり気のあるもの）
 川砂（粘土の10%くらいの量）

形作り：大きな葉っぱ、または、板、ぞうきん、水、タコ糸、粘土板

文様（もよう）づけ：ヘラ、縄、貝ガラなど
 野焼きのマキ：よく乾燥したもの。30cmの土器1個につき、10kgくらい（技術により変わる）

その他：シート、エプロン、など（野焼きの時には、軍手、火をつける道具、2～3mの棒など）

粘土に砂を混ぜてこねる

とってきた粘土は風通しのよい木かげなどに、くだいた状態で広げておきます（1週間以上）。

広げておいた粘土はカチカチにかわいています。石などの台の上で、ゴミをよけながら細かくくだきます。細かくくだいた粘土は、目の細かいふるいにかけて。

ふるいを通した粘土に、川砂（粘土の10%くらいの量）を混ぜ、水を加えて土を練ります。

練り上がった粘土は、むしろなどに包んで、1週間程度「ねかせ」ます。

ねかせた粘土はべたべたしますが、これがしっとりとなり、粘着力のある粘土になるまで、時間をかけて練り上げます。

（慣れないうちは、市販の粘土を使ったり、機械で混ぜてもらうのが無難かも知れません）

土器の形をつくる

粘土をダンゴにして、葉っぱ（ろくろのかわり）の上でたたきつぶして円ばん状の底にします。高さ30cmの土器で厚さ1cm以上。

次に、粘土ひもを作り、平らにのばして、はば5cm・厚さ1cmくらいの板にします。これを底の上に一段一段積み上げていきます。くっつきやすいように水を

少しずつつけて密着させます。つなぎ目をたんねんにヘラや指でこすってつぶし、すきまをなくします。

だいたい形ができたら、口のへりを切りそろえるなどして整えます。

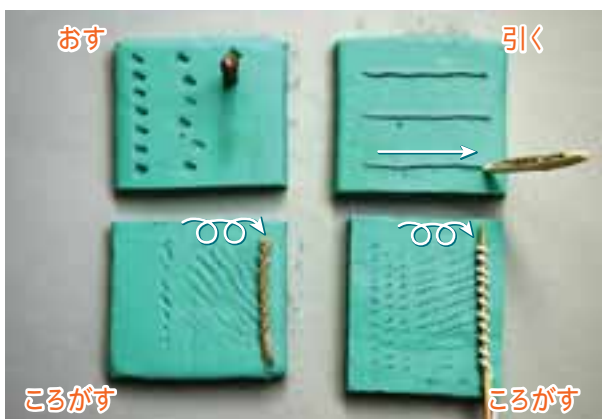
また、土器の外側と内側をヘラや小石、貝ガラなどでみがいて、形を仕上げ、水もれをふせぎます。

文様（もよう）をつける

表面が少し乾いたら、縄をころがして縄文をつけましょう。真横にころがしていくと、ななめの文様ができます。内側から手をそえて、形をくずさないように。

そのほか、細い粘土ひもをはりつけたり、ヘラなどで線を引きたり、貝ガラや棒をおしつけたりするなど、文様づけにはいろいろなやり方があります。

少し乾燥させて、表面をこすると少しツヤが出るようになったら、土器の内側を貝ガラや小石を使ってなめらかにします。水もれを防ぐためです。（土器の外側に手をそえるように）



文様のつけかた。縄を転がすと、ななめのもようができる。

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん

参考：「縄文土器を作る」（帯広・原始人の会、帯広百年記念館友の会）
 「縄文人になる！」関根秀樹、山と渓谷社、2002

「燃える男の土器の作り方のページ」園田（岩宿博物館友の会会員）
<http://homepage2.nifty.com/sonodaworld/makesearthenvessel1.htm>

どき 土器づくり ... 2. のや 野焼きする

かけ干しする

できた土器は、風の当たらない日かげで、ゆっくりと乾かします。2週間くらいは干します。急に乾かす

と、ひび割れのもとです。

のや 野焼き

まず、地面を乾かすためにたき火をします。この時、まわりに土器を置いて、ゆっくりあぶります。時々土器を回し、まんべんなくあたためましょう（1時間くらい）。

土器の色が変わり、地面の水分がぬけたら空だきは完了です。

マキがオキ火（炭火のような状態）になったら平らにならし、その上に土器を置きます。

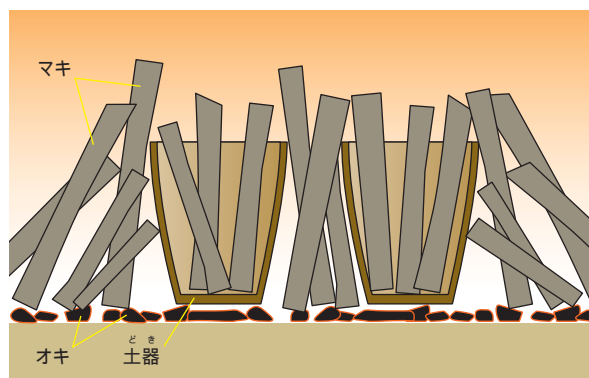
土器と土器の間や土器の中にもマキを差しこみ、さらに土器がかくれるくらいマキを周りに積み上げます。オキの熱で、マキには自然に火がつきます。

周りのマキが焼け落ちるころには、だいたい焼けています。長い棒を土器の間に差しこんで、そっと土器

をたおし、火を寄せて底を焼きます。

その後、自然に冷めるのを待ち、取り出します。土器がまだ熱い時にさわって、やけどしないように。

火を完全に消して、安全を確認したら完了です。



どきのや 土器の野焼きイメージ。マキで土器をおおってしまう。

火起こし ... 木と木をこすりあわせて

かつては、くぼみをつけた板の上で、木の棒をキリのように回転させて火を起こしました。板はスギなどのやわらかい木、棒はヤマガワなどの固い木がいいようです。

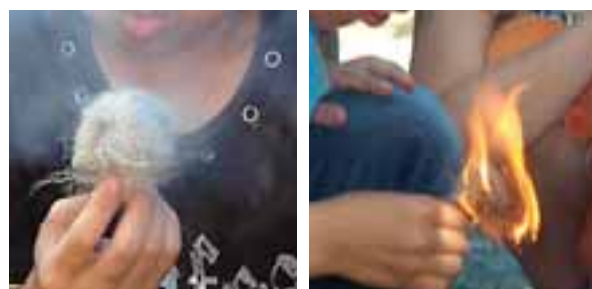
ただ、初めての人にはむずかしいので、写真のようなもう少し便利な火起こし道具（江戸時代からのものらしい）を使うといいでしょう。ひものねじりを使って回転させ、おもりはずみ車にしたものです。

木と木をこすりあわせることで「まさつ熱」をつくり出し、炭の粉をためます。そこへさらにまさつ熱を送りこむうちに、けむりが上がり、2mmくらいの炭火がとまります。

これを燃えやすいもの（ゼンマイの綿やタンポポの綿毛など。写真では麻ひもをほぐして鳥の巣のようにしたもの）に置いて包み、息をふきかけます。

もうもうとしたけむりが上がり、突然「ポツ」と火がつけます。あわてず落として、火ばさみで運びましょう。

最後に、つけた火は必ず完全に消すように。



得意、不得意はあるが、協力すれば子どもたちでも火が起きます。
(帯広市ジュニアリーダー養成講座あすかの会リーダーキャンプ)

およそ8千年前にあった集落

国際理解
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



八千代にあった縄文時代の集落の想像図。

(想像図: 帯広百年記念館蔵: 1)

およそ8,000年前、札内川支流の売買川が始まるあたり(帯広市八千代)の少し高くなったところに、家が2~5軒、建てられていました(八千代遺跡)。

地面を、直径4~6mくらいの円形に、深さ数十cmほり下げて床にした「竪穴式住居」です(直径1mの倉庫(?)や10mの集会場(?)もありました)。(p85)

床のまん中は、たき火をする「炉」でした。

八千代ではしっかりした柱は使われず、細い木で骨組みを作り、その上を木の皮や毛皮でおおい、さらに土をかぶせて屋根としていたようです。

土地を開くために、また、家を作る材料やたき木をとるためには木を切ります。その時には「と石」で石の表面をみがいて作った「石おの」が使われました。

八千代のメニュー

炉の周りの床には、40~50cmくらいある、平たい「台石」がおいてあります。

貯蔵用の穴にためておいたクルミやドングリをこの台石に乗せ、「たたき石」や「すり石」を使って割ったり、すりつぶしたりして下ごしらえをしました。

底が平らで深い「土器」にわき水を入れ火にかけて、木の实のアク(しぶみ)をとったり、煮炊きをしたりもしました。

あるいは、弓矢でとった動物の肉や売買川でとれた魚を火であぶったり、いろいろな材料を混ぜてねった「タネ」を、熱した石でじっくり焼き上げたりしたかも知れません。

そのほか、ヤマブドウやコクワ(サルナシ)といった、野生のくだものも、食事を豊かにしました。



八千代遺跡で見つかった木の实。 八千代遺跡のすり石と台石。



八千代遺跡の「炉」のあと、住居あとの床にあった。

(写真: 帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 3)

夏には川を下って魚とり

八千代では、おもに秋~冬の間、木の实とりや狩りをおこなって暮らしていました。

春になると売買川ぞい(あるいは帯広川ぞい)に川を下り、十勝川など大きな川に近い場所に、例えば、帯広市西8条13丁目の丘のへり(暁遺跡)などに住まいをかえたようです。ここでは、春から秋にかけて、石のおもり(石錘)をつけた網を使って、川魚をとっていました。(p93)

おそらく、春にはイトウ、夏から秋にはサケが一番のえものだったことでしょう。



以前、十勝川でおこなわれていた網によるサケ漁(採卵用)。平成8年(1996)の写真。

1 帯広百年記念館(おびひろひやくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地(緑ヶ丘公園内) 電話: 0155-24-5357 月曜日休館

2 と石(といし・砥石): 石材をみがいて美しくしたり、刃物をすって切れ味をよくしたりするため(研ぐ【とぐ】ため)の石。

千年以上使われた場所 ... 八千代遺跡 (八千代A、C遺跡)

「八千代遺跡」は、帯広市平野部の南西のはし、日高山脈ふもと近くの八千代町にあります。昭和60～63年(1985～88)に発掘調査が行われました。

遺跡は、売買川最上流部(今では直線的な水路)にそってあり、帯広川の支流の始まりも近くにあります。

この遺跡では、8,000～7,500年前ころの「暁式土器」がある竪穴式住居あとが、103軒見つけられました。

といっても、同じ時期に103軒の家が建っていたわけではありません。2～数軒の家が建ち、十数人の人が暮らす集落が、人や場所を少しずつ変えながら続いてきたようです。

ほかの遺跡の竪穴式住居あとには、柱を立てた穴がよくありますが、八千代遺跡では見つけられませんでした。しっかりした柱ではなく、細い木を組み合わせて屋根の支えとしていたようです。

この遺跡で見つかった土器や石器などは、帯広百年記念館で見ることができます。



発掘された時の八千代A遺跡の全景。おくの林の中に八千代C遺跡。(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)



八千代遺跡の位置。帯広市八千代町。



発掘されていない八千代C遺跡。林の中の丘にある。右手前の細い水路が売買川上流部。

🔍 ホタテ貝のあとがある土器 ... 観察のポイント



(右)八千代遺跡の土器。底にホタテ貝のカロのあとがついている。(帯広百年記念館)



土器底のホタテ貝のカロのあと。(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

残されている遺跡と水路の流れ

八千代遺跡は、半分くらい(C遺跡)が手つかずのまま、道道216号ぞいの小高い丘に残されています。八千代神社の周りの林です。ここにも集落がありました。道路ぞいに水路があり、これが売買川です。流れは直線化されていますが、それでも、暮らしの身近に川がある生活を、想像できるのではないのでしょうか。

土器の底にはホタテ貝のあとが

八千代遺跡で見つかった土器は底が平らで、ホタテ貝のあとがついています。帯広百年記念館で確かめてみましょう。

ホタテ貝は海の貝です。海まで行ったのでしょうか? それとも、海ぞいの人と、交流があったのでしょうか?

「暁遺跡」の土器と同じ仲間

八千代遺跡で見つかった土器は、それより前に暁遺跡(帯広市: p79)で見つかった土器と同じタイプの「暁式土器」でした。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

アムール川とのつながり ... 独特なヤジリ「石刃鎌」

帯広市の「大正遺跡」や浦幌町の「浦幌新吉野台細石器遺跡」「共栄B遺跡」は、およそ7,500年前の遺跡です。今とほぼ同じ暖かさのところです。

これらの遺跡では「石刃鎌」というヤジリ（矢の先）が見つかりました。

石刃鎌は、石からうすくはがし取るという旧石器時代から伝わる技によって「石刃」という石器を作りだし、それを加工するという独特な方法で作られたヤジリです。

石刃鎌は、シベリアやモンゴルなど大陸の広いところに広がっていました。

大正遺跡などの石刃鎌やいっしょに見つかった土器、それに家のあとのようすは、大陸のアムール川ぞいの遺跡のものに似ています。

およそ7,500年前、アムール川の人たちが、サハリンを通り海をわたって、途別川や浦幌川までやって来ていたのでしょうか。



アムール川とサハリン。大正遺跡。帯広市大正町。



大正遺跡(帯広市)で見つかった石刃鎌というヤジリと石刃。



大正遺跡(帯広市)で見つかった、石刃鎌を使う文化の土器。日本の縄文土器的ではない。円内はペンダントと顔料のもと。(石器・土器の写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 1)

売買川の(?)魚の骨で、もようつけ ... 稲田1遺跡の土器の文様



稲田1遺跡で見つかった土器とその表面にあった魚の骨による文様。(帯広百年記念館埋蔵文化財センター)



サケの仲間であるヤマメ。ただし、土器の文様の魚がヤマメだったかどうかまではわかっていない。

帯広市の稲田小学校の西向かいには、「稲田の森」と呼ばれるカシワなどの林があり、そこから北へ坂を下りると売買川の流れています。

逆に稲田の森の南側、売買川から見ると小高くなったところには「稲田1遺跡」があります。

稲田1遺跡からは、旧石器時代から縄文時代にかけての土器や石器、落とし穴のあとなどがみつかります。

その中に、およそ6,500年前の土器がありました。その土器には、サケの仲間の骨をおしつけたもよう(文様)が入っていました。

売買川でとれた魚なのでしょうが?



稲田1遺跡の位置。帯広市西16・17条南40・41丁目。

1 帯広百年記念館埋蔵文化財センター(おびひろひやくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター):帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

2 サケの仲間(サケのなかま):サケ科の魚。サケ、ヤマメ(サクラマス)、オシロコ、アママスなど。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

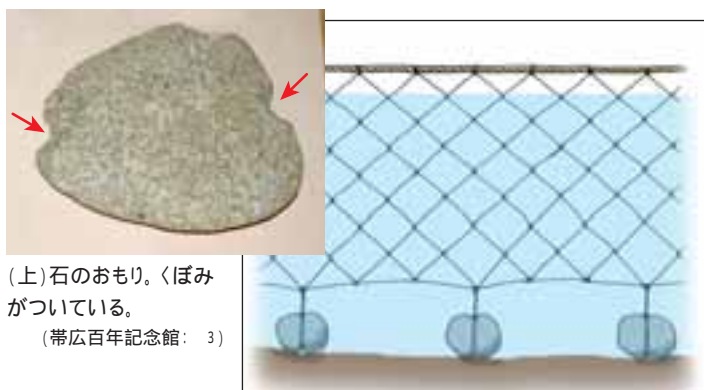
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語 さくいん

じょうもん じ だい かわりょう
縄文時代の川漁 ... すでに基本は今と同じに



(上)石のおもり。くぼみがついている。
 (帯広百年記念館：3)

石のおもりの使用イメージ。

じょうもん じ だい
 縄文時代の人々にとって、サケなどの川魚は大切な食べ物でした。ですから、川での漁をさかんにおこなっていました。
 とよころちよう たかぎ いせき うらぼろちよう へいわ い
 豊頃町の「高木1遺跡」、浦幌町の「平和遺跡」や「下頃辺遺跡」からは、小さなくぼみがつけられた石がたくさん見つかっています。くぼみのおかげで、ひもをしばりつけやすくなっています。

これは、およそ7,500年前、川で魚をとる時にあみ せきすい
 網につけられたおもり（石錘）です。

いしかりし もみじやま ごういせき
 石狩市にある「紅葉山49号遺跡」では、およそ4,000年前の「エリ」という川魚をとるしかけが見つかりました。エリは、川の流れの中に木のくいの一列を作ったもので、魚をワナの方へ向かわせるしかけです。

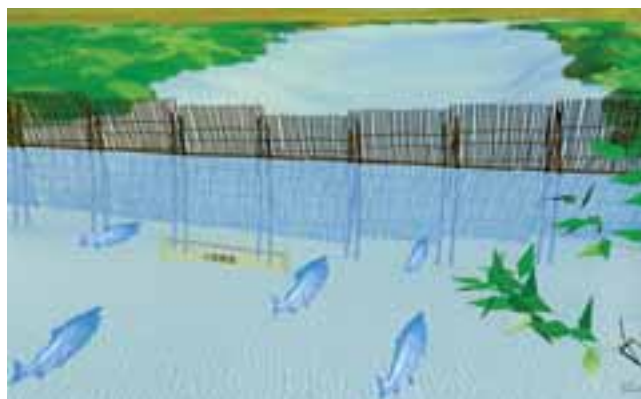
もみじやま ごういせき
 紅葉山49号遺跡のエリには、サケ・マスをとるためのものと、くいの間をヤマブドウのつるで編みこんだ、小さな魚をとるためのものがありました。

このほか、タモ網、丸木舟（一部分）、舟をこぐための櫂、魚をたたくための棒、魚をつくためのモリやヤス（石製や骨角製）、たいまつ用の道具、舟の形をした皿、すだれのように細い木がたくさんならんだもの（柵？）などが見つかり、縄文時代には今に通じる川漁がおこなわれていたことがわかりました。

残念ながら、こうしたあとは十勝では見つかりません（木の道具はふつつくさってしまう）が、同じ方法で漁がおこなわれていたのかも知れません。



もみじやま ごういせき いしかりし
 紅葉山49号遺跡（石狩市）で見つかったエリのあと。木のくいが一列にならんでいる。
 (写真：石狩市教育委員会蔵)



エリのイメージ。
 (CGイラスト：石狩市教育委員会蔵)



チョウザメ。十勝川には昭和時代なかばまでいたという。
 (浦幌町立博物館：4)

めむろちよう にししかり いせき
 芽室町の西土狩4遺跡（およそ6,000年前）では、サケ（？）、イトウ、ウグイの仲間とともにチョウザメの骨が見つかりました。

チョウザメがここまで十勝川をのぼっていたこと、また、ウグイの仲間がマルタ（河口近くから海にすむ）らしいということから考えると、このころの十勝川河口は、かなり上流に入りこんでいたようです。

当時は今よりも暖かく、海水面が高くなっていた「縄文海進（p84）」のころでした。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

3 帯広百年記念館（おびひろひやくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155 - 24 - 5352 月曜日休館

4 浦幌町立博物館（うらぼろちようりつはくぶつかん）：浦幌町字桜町16-1（らぼろ21内）電話 015 - 576 - 2009 月曜日休館

今より暖かかったころの暮らし

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



とかがわおんせん いせき だんきゅう おとふけちやうと かがわおんせんじやうか
十勝川温泉1遺跡のある段丘(音更町十勝川温泉浄化センター)。道を手前
に下って行くと十勝川。右下は見つかった土器(音更町郷土資料室: 1)。

およそ6,000年前、暖かい時期がやって来ました。平均
気温が今より2 くらい高く、海水面も今より3 ~ 4 m
高くなっていました。海が陸の方に入りこみ、河口も今
より少し上流にありました。(p84)

このころ、十勝川温泉の浄化センターあたり(音更町)に、暮らしている人がいました。今は、十勝川より3 m
くらい高い場所です(十勝川温泉1遺跡)。

家は、床をほり下げた「竪穴式」ですが、床の形は角
が丸い長方形です(大きいもので3.7m x 2.7m)。床は
平らではなく、段差がつけてありました。

この人たちは、底が丸いポウルのような土器や、底が
とがった土器を使っていました。

墓と「捨てる場所」

十勝川温泉1遺跡の家の近くには、墓が作られていました。

同じころ、芽室町の美生川と十勝川にはさまれた、段丘の
上にも墓が作られていました(小林遺跡: 右ページ)。

墓には副葬品として石器などが入れられ、「C」の形をし
た耳かざり(塊状耳かざり)が入れられることもありました。

この芽室の墓の周りは、土器(丸い底)・石器・土偶など
を「捨てる場所」だったようです。ただし「捨てる場所」は、
今のゴミ捨て場とは全くちがいます。

大切なものや使い終わったものなどを神に送り、あるいは
ものを「神」や「人」として見て、感謝や祈りをささげる、
そんな場所だったようです。だから、人の墓と同じ場所にあ
ったのでしょうか。(カムイ p134)



こばやしせいせき めむろ
(上)小林遺跡(芽室町)。墓の見つかった場所。



こばやしせいせき
(右)小林遺跡で見つかった墓。

(写真: 芽室町ふるさと歴史館ねんりん蔵)

落とし穴でシカをとる

それから数百年たったころ、今「JICA帯広」や「森
の交流館・十勝」がある丘の上にも、人が暮らしてい
ました。帯広川やその支流が流れる湿地を見下ろす場
所です(宮本遺跡・帯広市)。

そこで暮らす人は、落とし穴をつくってシカをとり、
あるいは木の実を集めて加工していました。

落とし穴は、2 ~ 4m x 1 m、深さ1 ~ 1.5mで、丘か
ら流れ落ちる小川(19条川)に水を飲みにもやって来た
シカを追いこむような形でつくられていました。

そのほか、北明1遺跡(芽室町)や共栄3遺跡(清
水町)、あるいは、八千代遺跡や稲田1遺跡(帯広市)
でも落とし穴がつくられています。



みやもとせいせき おびひろし
(上)宮本遺跡(帯広市)。今はJICA帯広の敷地。



みやもとせいせき
宮本遺跡で見つかった落とし穴。

(写真: 2枚とも、帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 3)

1 音更町郷土資料室(おとふけちやうきやうどしりやうしつ): 音更町希望が丘1番地(農村環境改善センター内) 電話 0155-42-4099
2 副葬品(ふくそうひん): 亡くなった人の亡きがらといっしょに、埋葬(まいそう)

されたもの。
3 帯広百年記念館埋蔵文化財センター(おびひろひやくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター): 帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

人の生死を見つめる神聖な場所 ... 小林遺跡

日高山脈から流れ下る美生川は、芽室町の中央を通って南西から北に向かい、十勝川に合流します。この美生川と十勝川にはさまれた段丘の上に、「小林遺跡（芽室町）」があります。

小林遺跡からは、墓のあと8個と、墓以外の穴のあと94個が見つかりました。また、合わせて10万点をこえる、土器（丸い底）・石器・土偶などが見つかりました。

このようすから、この場所は使い終わった道具を神に送る「捨てる場所（廃棄の場）」だと考えられています（94ページ参照）。

今では住宅地と畑になっていますが、およそ6,000年前の人にとっては、何かしら「神聖な」ところと感じられたのでしょうか。

土偶は3つあり、もとの形がわかるものには、オッパイがついていました。子どもを産み育てる女の人の力を大切に思っていたようです。

見つかった土器などは、芽室町ふるさと歴史館「ねんりん」に保管され、その一部が展示されています。



小林遺跡の位置。芽室町東9条10丁目・北1線。



小林遺跡のある段丘。美生川の堤防から。



(上)小林遺跡(芽室町)の「捨てる場所」。祈りの場所でもある。(写真:芽室町ふるさと歴史館ねんりん蔵)

ボウルのような土器 ... 観察のポイント



小林遺跡の土器。底に丸みがあるものが多い。



小林遺跡の玦状耳かざり。

(写真:3枚とも、芽室町ふるさと歴史館ねんりん蔵)



小林遺跡の土偶。タテ約5cm。

遺跡のある場所と川の流れ

勝手に畑や人の家の庭に入っただけではいけません。道歩きながら、小林遺跡のある場所を見てみましょう。美生川と十勝川がどちらにあるか、わかりますか？

また、美生川の堤防の上を歩いて、下から見上げてみましょう。あなたは、「神聖さ」を感じますか？

ボウルのような丸底土器

小林遺跡の土器はパケツのような大型の深いものと、ボウルのような形のものがあり、底は丸みをもっています。表面には、太い縄目のもようがつけられています。

耳かざりや土偶

女の人の土偶や「C」形の耳かざり（玦状耳かざり）も見てください。土偶は、リアルではありませんが、デフォルメされた中に、女の人のやわらかさとたくましさ表現されています。

4 ふるさと歴史館ねんりん（ふるさとれきしかんねんりん）：芽室町美生2線38-15（旧美生小学校）電話 0155-61-5454 火曜日休館

5 デフォルメ（déformer：フランス語）：美術などでものを表現する時、そのままの形ではなく変形させること。

寒くなったころの「墓地」

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで



針葉樹と広葉樹が混ざっている秋の林(上士幌町糠平湖畔)。深緑が針葉樹。4,000年前ころから寒くなり、平野でも針葉樹が増えた。

4,000年前ころから、だんだんと寒くなっていきました。世界に氷河が増え始め、海の水が減り、陸地が少し広がります(海退という)。

十勝の丘では、ドングリの木(ミズナラとカシワ)やイタヤカエデが少し減りました。かわりに、トドマツやエゾマツなどの針葉樹と、シラカンバ(シラカバ)が増えていきます。

湿地では、こおった土が部分的にもり上がり、とけて周りがけずられる、というくり返しの中で、「十勝坊主(p84)」という、もり上がりのある地面ができました。(帯広市の帯広畜産大学農場・更別村の上更別湿原[p63]・音更町の東音更など)

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語 さくいん

石が集められた墓

およそ3,000年前、利別川の支流、足寄町ベラボナイ川ぞいの段丘の上に墓が作られていました(上利別20遺跡)。

そのひとつには、ベラボナイ川の石(20~40cm)が262個も集められています。特別な人の墓だったのでしょうか?

この遺跡では「きゆうす」のような注ぎ口のついた土器、土でできた耳かざりや腕輪(p99)「うるしぬり」がされたクシ(?)などが見つかっています。

同じころ、池田町の利別川近くでは、土でキノコの形やモモンガのような動物の形のもの、あるいはスタンプが作られていました(池田3遺跡:p98)。



上利別20遺跡の土器。(写真:足寄町教育委員会蔵)



上利別20遺跡の位置。足寄町鷹府。



池田3遺跡の動物形土製品。(写真:池田町教育委員会蔵)

十勝川をはさんだ丘の墓

およそ2,500年前、十勝川の本流ぞいにある丘の上(音更町宝来)と、十勝川や札内川をはさんだ対岸で、札内川と途別川の間にある丘の上(幕別町依田)に、墓が作られています(相生1遺跡と札内N遺跡)。

相生1遺跡の墓には、土器がスッポリと入れられ、焼けたイノシシやワシ、魚の骨が混ざった土でうめられたものもありました。また、墓の周りには火をたいたあとがあります。亡くなった人を送る儀式が、おこなわれていたのかも知れません。



相生1遺跡と札内N遺跡の位置。



相生1遺跡(音更町)で見つかった、スッポリとうめられた土器。右はこれを復元したものの。(写真:復元土器:音更町郷土資料室蔵:2)

1 イノシシ:イノシシは北海道には生息していない。しかし、縄文時代も終わりがくると、北海道内各地の遺跡からイノシシの骨やキバが見つかるようになる。飼われていた、という説と、骨付きの肉が持ちこまれたのだ、という説がある。

2 音更町郷土資料室(おとふけちょうきょうどしりょうしつ):音更町希望が丘1番地(農村環境改善センター内)電話 0155-42-4099

今は消えた遺跡の丘 ... 札内N遺跡

「札内N遺跡（幕別町）」は、札内川の東にある段丘の上面（上札内I面・上札内IIa面〔p54〕）にあります。かつては、札内川の本・支流や十勝川の支流が流れる氾濫原を見下ろす場所でした。

この丘をくずして、家や道路をつくるための土や砂利をとることが決まり、その工事前に発掘調査がおこなわれました（平成5～10年〔1993～98〕）。発掘調査では、およそ2,500年前の墓が141カ所見つかりました。

焼いた土でうめられた墓、石でうめられた墓、黒曜石のかけらがたくさん入った土でうめられた墓など、いろいろなタイプがあり、土偶やたくさん

の土器が入れた墓もありました。この遺跡の近くにある「札内K遺跡」からも8基の墓が見つかり、十勝川と札内川を見下ろす札内の丘全体が、当時、「神聖な場所（墓域）」とされていたようです。

調査のあと工事が進められ、遺跡のあった丘はかなり消えてしまいました。



札内N遺跡（幕別町）で見つかった墓。くぼみのある石を集めて、壁ぎわにならべてある。（写真：幕別町教育委員会蔵）



札内N遺跡と札内K遺跡の位置。幕別町字依田。



札内N・K遺跡の方から見た札内の住宅地。かつては氾濫原だった。遠くに見える丘に相生1遺跡がある。

大きな墓にはだれがねむっていたのだろう？ ... 観察のポイント



大きな石がたくさんあった。墓をつくるための石が集められていたのか？（写真：幕別町教育委員会蔵）



札内N遺跡で見つかった土器。今も同じ丘に墓がつくられている。札内新墓地。（写真：幕別町教育委員会蔵）



大きな石がたくさん集められた場所

札内N遺跡には、10m以上の大きさがある穴があり、そこからは、1～2mあるような石がたくさん見つかりました。

いろいろな形をした土器も

札内N遺跡では、「鉢」や「つぼ」、「コップ」や「皿」の形をした土器や、「舟」のような形をした土器が見つかりました。表面には、細かい縄文（縄をころがしてつけるもよう）が全体につけられ、そこに、細かい線や丸い穴といったもようがつけられ、粘土がはりつけられてもいます。

幕別町ふるさと館で見ることができます。

今も墓地がある

札内N遺跡や札内K遺跡のあった丘には、今「札内新墓地」や「札内墓地」があり、東側の斜面には札内神社があります。数千年をこえて、現代人にも通じる「何か」があるのかも知れません。

3 氾濫原（はんらんげん）：川の近くであり、川が氾濫する（あふれる）と水につかる低い平地。（p46）

4 幕別町ふるさと館（まくべつちょうふるさとかん）：幕別町依田384-3（依田公園横）電話 0155-56-3117 月・火曜日休館

寒くなったころの生活のあと ... とくに少なくなる家の遺跡

寒くなってきた4,000年前ころから、遺跡の数、とくに家のあとがめっきり減ります。一方で、墓のあととはたくさん見つかっています。

このころには、十勝だけでなく日本列島東部全体で遺跡の数が少なくなっています。やはり、寒くなったことが理由のようです。

ただ、墓はつくるけれど近くに人は住んでいない、ということはあまり考えられません。

それまでの遺跡があった「川を見下ろす丘のへり」ではなく、もう少し低い「斜面の途中」や「川に近い場所」で暮らすようになったのかも知れません。

池田町の「池田3遺跡」は、もともとの十勝川と利別川の合流点近く、今の利別川の堤防から見下ろすことのできる、清見二線川ぞいの低い場所にあります。



(上)利別川上空から見た発掘している時の池田3遺跡。(写真:池田町教育委員会蔵)



(右)池田3遺跡の位置。池田町字西2条3丁目。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

縄文時代の墓 ... 体をおり曲げる



縄文時代の埋葬のようす(小林遺跡の墓をもとにしている)。(イラスト:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 3)



いろいろなものが入られていた墓。ここでも赤い顔料(ベンガラ:右写真)が見つかる。(大正8遺跡:帯広市)(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

縄文時代の墓は、多くが地面に穴をほって亡きがらうめたものです(土壙墓という)。屈葬といって、亡きがらが、ひざをかかえるような形におり曲げられています。

副葬品として、石器などがいっしょにうめられることもよくあり、小林遺跡(芽室町: p95)の墓からは、Cの形をした耳かざり(塊状耳かざり)が見つかっています。また、この墓からはベンガラという赤い顔料が見つかっていて、墓穴の底が赤くぬられていたようです。

また、そのほかの遺跡からは、石でうめられたもの、焼かれた土でうめられたもの、黒曜石のかけらがいっぱい入った土でうめられたもの、石器がたくさん入れられたもの、石器がたくさん入れられたもの、なにも入れられていないもの、など、さまざまなタイプの墓が見つかっています。

決まった場所に墓がいくつも作られるようになるのは、およそ6,000年前からのことです。小林遺跡では6つの墓

が集中していました。また、札内N遺跡(幕別町: p97)では、およそ2,500年前の墓が100以上集中してつくられていました。

相生1遺跡(音更町: p96)で見つかった墓では、埋葬の時にイノシシ・ワシ・魚を焼き、その焼けた骨といっしょに土でうめる、ということがおこなわれていたようです。このことは、埋葬する時に儀式(葬儀・葬式)がおこなわれたことを想像させます。

1 もともとの十勝川(もともとのとかがわ): 統内新水路(とうないしんすいり)完成の昭和12年(1937)まで、十勝川は今のオシタツ川下流部を流れていて、利別川は池田町利別南町で合流していた。(統内新水路 p190)

2 副葬品(ふくそうひん): 亡きがらといっしょに墓に入れられるもの。

3 帯広百年記念館埋蔵文化財センター(おびひろひやくねんきねんかんまいざうぶんがざいセンター): 帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

縄文ファッション ... さまざまなかざり

縄文時代の服

縄文時代の遺跡からは、ぬい針や糸、せんに製品などが見つかっています(十勝では見つかりませんが、くさって土にかえたのでしょう)。

縄文の人々は、植物のせんにを編んだ「布」や動物の毛皮などで服を作っていたようです。

縄文時代のアクセサリー(装身具)

旧石器時代(15,000年くらい前)には、すでに、かんらん石やコハクのビーズ玉が作られていました(知内町の湯の里遺跡など)。そして、縄文時代には、今あるほとんどの装身具が(材料はちがうが)作られるようになりました。

ヘアピン・くし・ヘアバンド・耳かざり・ペンダント・ネックレス・プレスレット・腰かざりなどなど。最近も流行しているタトゥー(入れ墨)やボディペインティングもおこなわれていたようです。

こうしたものは、ただ身をかざるためだけのファッションではなく、まじないの道具だったり、悪霊から身を守る意味があったり、また、自分をりっぱに見せるためだったのかも知れません。

ただ、見方によれば、身をかざって美しく・かっこよく見せたり、恋人同士がおそろいのネックレスや指輪をつけたりする「ファッション」は、人の心をあやつる「まじない」のひとつなのではないでしょうか?

十勝縄文の装身具 1

八千代遺跡(p90)や曉遺跡(p79)(帯広市)では、およそ8,000年前のビーズ玉(かんらん石、蛇紋岩)やペンダント(コハク、泥岩)が見つかります。これらのかんらん石やコハクは、大陸から持ちこまれたものではないか、と考えられています。

八千代遺跡では、親指の頭くらいのメノウを戸蔭別川から拾ってきて、穴を開けかけたものが見つかります。いっしょに穴あけ用のキリ(石器)も見つかっていて、何かの事情で作業を中断したようです。

6,000年くらい前には、小林遺跡(芽室町: p95)で、Cの形をした「玦状耳かざり」が使われていました。墓に埋葬された人の、頭の近くに置かれていたようです(左ページ)。

同じタイプの耳かざりが、大陸の東アジア一帯に広がっていました。十勝では、ほかに十勝川温泉1遺跡

(音更町: p94)でも見つかりしています。

十勝で見つかったものですが、材料は遠い場所で産出した蛇紋岩であること、また、とてもいいな作りであることから、多くは遠くの場所で専門的な「職人たち」の手によって作られたものだと思います。

5,000年くらい前に道央から道東北部で使われていたヒスイ玉は、新潟県の糸魚川産のヒスイで作られていることが、蛍光X線分析という方法で確かめられています。



(左)腕輪と滑車状耳かざり(上利別20遺跡:足寄町)。 (右)八千代遺跡(帯広市)で見つかった玉やペンダント。

十勝縄文の装身具 2

縄文時代が終わりに近づくと、北海道東北部を中心に、コハク玉が大量に副葬されている墓が見つかります。十勝でも池田3遺跡につくられていた墓から、いろいろな形をしたコハク玉が141個見つかりました。

これらのコハクは、サハリン産ではないかといわれています。

上利別20遺跡(p96)の3,000年前ころの墓からは、土を焼いて作られた滑車のような形をした耳かざりやうるしぬりのクシ(のようなもの)が見つかり、さらに、もう少し新しい時期の腕輪(プレスレット:土製)も見つかりしています。

縄文ファッションは世界をつなぐ

このように身をかざる文化は、とても長い歴史を持っています。

そして、装身具を調べることで、縄文時代には北海道と本州、あるいは大陸との間に、広く交流があったことがわかります。石器や土器とともに、縄文ファッションも世界をつないでいたのです。



縄文ファッション

左上から、耳かざり、ネックレス、プレスレット(腕輪)。

右上から、クシ、ヘアピン、ペンダント、貝のプレスレット。

(写真左:足寄町教育委員会蔵、写真右とイラスト:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

4 かんらん石(かんらんせき):鉱物(こうぶつ)の一つ。固く、オリーブのような緑色。透明で割れ目の少ないものは宝石(ペリドット)とされる。
5 コハク(琥珀):木の樹脂(じゅし)が地中にうまり、長い年月をかけて固まった宝石。

6 蛇紋岩(じゃもんがん):かんらん岩(かんらん石を多く含む岩石)が水と反応してできる岩石。表面に蛇(ヘビ)のような模様が見られることから名づけられた。
7 泥岩(でいがん):泥が海底や湖底などにたまり、固まった岩石(堆積岩p28)。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん